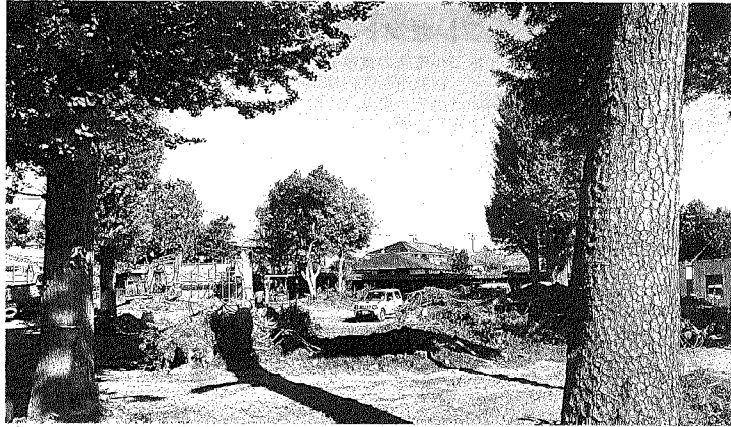


浜松「森岡の家」問題

市の解体に反発続く

静岡銀行頭取などの実業家が輩出した平野家が1993年に旧浜北市に寄贈した浜松市の施設「森岡の家」(浜北区貫布弥)の解体工事が進んでいる。市は隣接する文化センターの駐車場にする方針だが、保存を求める団体が訴訟を起こすなど反発も続いている。

森岡の家は遠州鉄道浜北線0平方メートル敷地に家屋や土庫から徒歩数分、約420歳、長屋門、庭園などがあ



解体工事が進む「森岡の家」。今月初めには樹木などを残すだけになった。浜松市浜北区貫布弥

り、市の浜北文化センターに隣接する。

「耐震・安全に難」

市が解体を決めたのは、「座敷」と呼ばれた棟の耐震性がきつかった。一階敷は1889(明治22)年、平野家第5代当主で実業家の平野又十郎氏が建てて客間として使っていたも

の。市は有料貸し出しや施設見学の受け入れをしてきたが、2008年に「倒壊の危険がある」との耐震調査結果が出た。市は見学だけに切り替えただが、見学者は年間3000人程度。市は施設の廃止方針を定め、昨年1月に諮問機関「浜北区協議会」の答申を、同3月には市議会の議決を取り付けた。

市浜北区まちづくり推進課の藤本正明課長は「わずかな見学者のために、年に170万円の維持管理費をかけられない」と廃止理由を話す。「座敷」は市指定文化財になるレベルではな

かったという。敷地内の松やイチヨウの大木についても「専門家によると古くても樹齢1500年程度。むしろマツクイムシの被害や倒木の危険性があり、落ち葉で側溝が詰まって周辺住民からの苦情が多い」と主張。今年1月には地元自治会から樹木伐採や整地を求める要望書が出された。

在、310台しか収容できないうえ、民間から借りている95分分の土地の返却を求められているという。

一方、保存を求めている「森岡の家」市民の会のメンバーは「文化的な価値だけでなく市民の憩いの場になっている」として市と協議を重ねたが折り合

た。以前なら建設中止を求める仮処分を申し立てるケースもあったが、同課は「地方自治法の改正で、住民訴訟は民事保全法が規定する仮処分をすることができない」として問題はない。

世界に誇る宝物 なぜ自ら壊す

反発の声を横目に解体工事が進むなか、県対外関係補佐官を務める東郷和彦・京都産業大教授(70)が、工事中と施設保全を求めて本紙に寄稿した。元外交官の東郷氏は「森岡の家は日本が世界に誇る価値があり、世界的に注目を集める可能性がある」として残る庭園の一部保存を訴える。

6月下旬のある日、県庁で新聞を見ていたら、「森岡の家解体」の見出しが目についた。世界は自分にも魅かれて飛び込んできた。全く信じがたいことが目の前で起きていた。日本人が世界に誇れる、何て飛んでくる。7月上旬、森岡百年の歴史を持つ森と、明治以来の庭園を見に行った。天にそびえる松の木や、樹齢1000年を超える銀杏の巨木や、明治の文化を示す平野又十郎氏の屋敷もつ森岡の庭園をとりこむ。駐車場にするために、世界は今「グローバルゼーション」という恐ろしい時代に入っている。情報ネットワークを通じて瞬時に世界を駆けめぐる。魅力のあるところに人が殺到す

声かたちを聞き、庭園周辺の住民の署名として

東郷和彦・京都産業大教授が本紙寄稿



東郷和彦氏

て集まっているのではない。森は鎮守の森として、窺い感のある都市化生活の癒やしだった。あの森は、浜北の地元植木職人にとっては、自分たちの仕事場の象徴であり、彼らは自発的管理を申し出ている。そして、この地の歴史の深さを発掘している郷土史家にとっても、誇りだった。これこそ、日本の未来と子供たちに希望を残す。今の現場の声なのである。東京の外交官や外国人記者なら、誰ひとり理解できないだろう。オリンピックに来る外国人

が関心をもち、ツアーが組めるのに、その一番の「売り」を自分で壊すとは！

「オプザバー」の日本特派員を呼んだビクター・マクゲル氏は署名サイト「Language on」に載った本件を知り、「浜松市は歴史遺産を保存し、この文化破壊を即刻中止すべきだ」との声を寄せてきた。

(大島真視、大内悟史)